



令和8年7月1日

第 1 号



「生きること」について

「道徳の日」では、さまざまな人の生き方や社会情勢についての話を聞き、自分自身の心と向き合いじっくり考える時間をもっています。今年度の1回目は、「生きること」についてです。やなせたかしさんのエッセイを通じて、アンパンマンに込められた思いや「生きること」について考えました。生徒の感想では、やなせさんの生き方や思いから、自分がこれからどう生きていくのか書いていました。生きていく中で、上手くいくこともあれば、失敗するときもあります。人の生き方から自分を見つめ直すきっかけになればと思います。

☆ 生徒の感想 ☆ 【※ 裏面：放送内容】

私は放送を聞いて、たとえ自分がすごくなったとしても、有頂天にはならず、いつも通りの生活をし、みんなにきがるに声をかけてもらいたいと言ってすごいなと思いました。どこを目指すかによって、考え方も少しは変わるかなと思いますが、どこを目指していても同じなのが仲間や気軽に話しかけてくれる人がいると人生が少しでも明るくなるということを感じました。

「巨匠や偉大な人になると寂しくなってしまう」というところで僕は偉くなりすぎると怖がれたりしてしまうことがわかりました。アンパンマンやバイキンマンのように、戦いながら共存していることは人の心と同じだと知って、今よりもっと自分の心や考えを大事にしようと思いました。

やなせさんは、いろんな人（特に子どもたち）に親しまれやすいように優しい作品を作り続けたことから、自分の夢や目標、物事の継続をしやすくするためには、自分の考えに合った行動をしていくべきだと感じました。自分もその考えにあった行動をしていきたいです。

「残された時間を一生懸命生きられればそれでいい」という言葉が心に残りました、うまくいかなかったときにはこの言葉を思い出してがんばりたいです。

自分が求めていた仕事を一直線に追いかけてすてきだなと思いました。人気上昇したら、中にはじまんをする人もいるけど、やなせさんは前と変わらず生きているのでそこもすごく良いと思いました。

やなせさんの話を聞いて、生きていくには期待しすぎずゆっくり前進することが大切なのだと分かりました。「ボクはそういう人になりたいのだと選んだのだから仕方ありません。」という文章から、焦らずあるがまま受け入れる姿勢が読み取れました。今あるものにいっぱい感謝し、生活を安定して続けられるようになりたいと思います。自分と他人を比べすぎず、自身に合ったスピードを歩く大切さが学べました。

自分の書いた本に人気が出てきても有頂天にはならず、朝から晩まで仕事をして生活も少しも変えずにいた。だからこそ、やなせたかしさんはここまでみんなに知られる人気人になることができたのだと思った。

「生きること」について

2026/6/23 実施



目標にしていることや夢を叶えていくために、勉強や運動など様々なことに取り組む中で、頑張っても上手いかなかったり、目標を見失い、途中で力尽きてしまったりしたこともあると思います。社会に出ていく中で、そのようなときはどのように行動すると乗り越えられるのでしょうか。

やなせさんは54歳の時に『アンパンマン』を生み出しました。『アンパンマン』にこめられたやなせさんの思いや仕事に対する考え方を通じて、「生きていく」とについて考えていきましょう。

ボクは巨匠とか偉大な人物とか、そういう人になりたいとは思いません。なぜかといえば、偉くなりすぎると怖がられてしまう。恐ろしい存在になってしまう。

ボクの先輩に、巨匠という名前と呼ばれる先輩がいましたが、「やなせ君、本当のことを言うと、ぼくはとても寂しい。若い人がぼくを敬遠するようになった。仲間としていっしょにいたいのに、なんとなく一目を置かれている。仕事も軽い仕事は頼みにこない。みんな重量感のある大作ばかりだ。ごく気楽な仕事ができなくなってしまった。」と、話していました。

ボクは、雲の上の人にはなりたくありません。子どもたちから、「アンパンマンのおじさん握手して。」と言われているのが、うれしいのです。

ボクは高知県で生まれました。そして、東京高等工芸学校の工芸図案科を卒業してすぐ兵隊になりました。青春のいちばん大切なときが兵隊だったから、これはちょっと絵をかくのは無理かもしれないと思いました。焼野原の日本に帰ってきて、それでもデザインの仕事を始め、そのうちに漫画家になりました。岡部冬彦とか根本進、加藤芳郎といった漫画家が大活躍で、その華やかさは目がくらむようでした。

ボクは、そこそこ仕事はしていて、食うに困らなかったものの、その時代を代表するような作品がありませんでした。まあ、いくらあせってもだめで、ハハのん気だねというふうでした。

ところが、そのうち漫画界に逆風が吹き始め、劇画全盛ということになりました。ボクは方向を変えて、まず「やさしいライオン」という絵本をかきました。そして、漫画というよりも、一つのメルヘンとして、絵本の中でフェアリーを登場させるようにアンパンマンをかきました。もちろん、こんな作品が、子どもに受け入れられようとは思っていませんでした。

ところが、不思議なことに、アンパンマンの人気は少しずつ上昇していきました。ボクの友人のように一夜にしてスターという具合ではありませんでした。だから、少し人気が出てきても、ボクは有頂天にはなりませんでした。人気があるといっても、なんだか他人事のような気がしています。生活は少しも変わりません。カミさんにもらう小遣いも同じです。朝から晩まで仕事をしています。

もし、ボクが成功者だとすれば、世間並みの成功をしなかったことです。そして、この世界ではボクはまだ新人にすぎません。でも、それはボクが選んだ道で、ボクはそういう人になりたいと望んだのだから仕方ありません。

アンパンマンにも、そういうところがあります。自分の顔を食べさせて人を助けるという仕事を続けています。戦う相手はバイキンマン。バイキンは食品の敵です。しかし、実はパンを作るのもイースト菌なんです。戦いながらアンパンマンとバイキンマンは、共存しています。

ボクらの心には、善と悪があります。善と悪は戦いながら共存しています。そのことをボクは、ストーリーの中に入れたかったのです。どこへいっても、ボクは今ではアンパンマンのおじさんと、子どもたちに言われます。それは気恥ずかしいことでもあり、うれしいことでもあります。

今でも絵本をかき続けています。毎日毎晩せせとかきます。歌も作ります。絵もかきます。

ありがとう！神様。よくもボクにぴったりの仕事をくださいましたね。ボクはそのことを感謝しています。

残された時間を一生懸命生きられればそれでいい。もし生まれ変わっても、今とおんなじ仕事がいい。

昨年度「法について」の通信欄に保護者の方から感想をいただきました。貴重なご意見ありがとうございました。一部紹介させていただきます。

- ・知り合いが裁判員に選ばれ、改めて「法」について考えさせられました。昨今の日本では様々な犯罪が毎日のように起こり、裁判が行われています。子どもたちが大人になり裁判員に選ばれた時、慌てないためにも日ごろから一緒に「法」について話し合えるようにしたいと思います。
- ・裁判員裁判の目的は国民の視点や感覚を刑事裁判のプロセスに反映することで司法に対する国民の理解及び信頼を高めることにあります。裁判の判決により人の人生は大きく変わることから裁判員は判断するとき、法に則る正義の部分と情状酌量の法律だけでは捉えきれない部分の公正な判断を行う力が必要になると思います。正義と感情のバランスをとり、判断していく視点でニュースを見することで「法」への理解が深まると思いました。